

家庭教育的道歌の起源について

西 中 研 二*

The home education & Doka (Origin of Doka)

There are various definitions of “doka” and “shakukyoka”, but the rationales are not clearly shown. This treatise pursued and researched historical facts such as “Sekimon Shingaku” “Ikyu Sojyun” “Kenseiki” “Monk Ordinance” “Hokeykyo” and clarified the relationship between “doka” and “shakukyoka”.

はじめに

広辞苑によれば、「道歌とは、道徳訓戒の意を分かり易く詠んだ短歌。仏教や心学の精神を詠んだ短歌」と二つの意味を列挙している。鈴木棠三は、「道歌とは、道徳的あるいは処世的な教訓を詠んだ歌であるが、特に心学者などの道歌に限定せず、神仏の教えの歌、宗教歌なども包含した名称」とし、神仏の教えを含む道徳的処世的な教訓の歌と幅広く定義している¹。

国立図書館デジタルコレクション蔵の無染居士編『道歌心の策』（めとぎや宗八、1833年）の序に「代々の祖師も、うたは道心のしるべともなるよしを称し、修行のいとま、是を詠じ給ふ人すくなからず」とある。即ち昔の高名な僧侶が、仏の考えを追い求める自分の心を修行の合間に詠んだ歌を道歌と称したと定義している。

心学者・柴田鳩翁（1753-1839）によれば、「心学道話は、家業に追はれて暇のない御百姓や町人衆へ、聖人の道のあることをお知らせ申したいという先師の志でござります」。しかし「聖人の道も女中や子供衆の耳には通ぜぬ」。そこで「譬をとり、おとし話を致しお話申します²」とし、女子供にも理解できるような道歌を利用したという。

中澤道二（1725-1803）は、「生れ子が、次第次第に、智慧づきて、佛に遠く、なるぞ悲しき」と述べ、「幼い時は、父母以外に心は動かないが、成長するに従い、見る物、聞く物に心を奪われていく」と子供が悪に染まっていく過程を分析している³。

国学者・本居宣長（1730-1801）は、「書読めば、千里のよその、事までも、ただここにして、目に見る如し」と詠み⁴、読書の重要性を示唆している。

一方日田の俊才・広瀬淡窓（1782-1856）は、「心得に、なることならば、見聞きせよ、読書ばかりが、学問でなし⁵と読書に留まらず、見聞も大事であることを言っている。

一休宗純（1394-1481）は、「一休も、破れ衣で、出るときは、乞食坊主と、人はいふらん」と詠み⁶、身嗜みの大切さを教えている。

本稿は、上記のように、道歌の中には家庭教育の手段としての道歌が多く存することに着目し、隆盛を極めた江戸時代の道歌から歴史を遡り、家庭教育的道歌の起源を探ってみようとするものである。

I. 石門心学

石田梅岩が創設した石門心学は、江戸末期の明和から文政にかけての70年間に、梅岩の多くの弟

* 日本家庭教育学会常任理事、学術博士

子による道話講義によって普及した。彼等は、全国各地に設置された講舎に人々を集め心学を説いた。道話は、家業に迫られて暇のない百姓や町人、文字の読めない女中や子供等も理解しやすいように、和歌・例え話・実話・落語等卑俗の諷刺を恐れず、大衆の心に訴えることを眼目とした。その内容は、聞書き本として世に出され、心学道話として定着した。ここでは石田梅岩・中澤道二・柴田鳩翁の教化方法を比較することによって、道歌と道話の関係をみてみたい。

1. 石田梅岩の教化の特徴

(1) 問答形式

石田梅岩の著書『都鄙問答』も『齊家論』もQ&A、則ち問答形式で書かれているのが特徴的である。これから推察するに石田梅岩は、聴衆からの質問、あるいは自問自答形式で講義を進めていたことが覗かれる。

(2) 『論語』『孟子』からの引用

各段、各テーマにおいて、自分の考えを披歴した後、孔子曰、あるいは孟子曰と引用し、自分の考えが正しいことの裏付けとしている。あるいは反対に、孔子や孟子の考えをまず述べ、自分もそのように考えると結論する形式をとっている。

(3) 具体例：「孝の道を問の段」

「世間を見るに、家業に精を出し、金銀を持ち、父母に不自由をさせぬように養うならば、例え親類に対し不義理があっても、不孝者とはいわれなしか」との質問に対して「あなたは、親を養うことを孝と考えているが、人は、犬や馬を養っている。親は、犬馬と同じか。父母に仕える道は、敬である」と答えを『論語』から引用している⁸。

2. 中澤道二の教化の特徴

(1) 道話の前後に道歌を入れる。

問題提起を説話で行い、結論として道歌を引用している場合と問題提起を冒頭の道歌で行い、結

論を説話で行う場合の二形式である。

(2) 具体例

①「道」とは心のこと

「生れ子が、次第次第に、智慧づきて、佛に遠く、なるぞ悲しき」

小さき時には、とと様・かか様と言って付慕い、父母の外に心はない。即ちこれが「道」である。それが次第に知恵付いて、その生え抜きの「道」を離れ、見るもの・聞くもの・触るもの等物事に執着するようになる⁹。

②嫁と姑

嫁と姑の仲の悪い話は、世間に沢山あるが、この嫁姑は、珍しい仲の悪さであった。しかし子供はあるし、去るにも去れず、居るにも居られず、苦しみ通して日々の業が積り積って益々仲が悪くなる。そこで姑を殺す気になった。しかし事情をよくよく調べてみると「返事をしなかった」という僅かなことが火宅の始まりであった。

「吉野川、その水上を、尋ぬれば、^{ムグラ} 葎の雫、萩の下露」¹⁰

以上を要するに、石門心学一統の講義方法には、道話の冒頭に論語・孟子等から引用し、それを百姓・女子供でも理解できる平易な言葉で教化する方式と、説話の内容を言い表している道歌を道話の前か後にいれ、道歌を通じて説話の内容を理解させる方式がある。

II. 法話と和歌

1. 沢庵宗彭の教化の特徴

沢庵宗彭の家庭教育の仕方は、実弟である秋庭半兵衛に送った手紙で垣間見ることができる。

(1) 十人を召し抱える武士は、八・九人程と少し少なめに召し抱えるのがよい。月を見て見なさい。十五夜でまん丸になった月は、十六夜で一分欠けている。「おもへただ、みつればやがて、欠く月の、いざ宵の空、人の世中」という歌があるとしている¹¹。

(2) どうか借金などしないように。借金をすれば

親しき親類とも疎くなり、怨みのない人に恨み言をいうようになる。「この才覚候へば、佛神も入らぬ事にて候」といい「心だに、誠の道に、はいりなば、祈らずとて、神や守らん」としている¹²。

2. 一休宗純の教化の特徴

(1) 先人の歌を引用

① 慈鎮の歌

「かりの世に、また旅寝して、草枕、夢の世にまた、夢をみるかな」

「引き寄せて、結べば草の、庵にて、とくればもとの、野原なりけり」

これは色相を、即ち肉眼で見える一切の形や様子を軽く考えなさいということである。いつ困難なことが生じて、心の内では何も考えないことである。「病難いたく攻め来るとも、その苦しみに任せて相果て候へ」と唐の黄檗禅師の『伝心法要』に書かれているとある¹³。

(2) 自分の歌を引用

① 仏堂で一夜の宿を取ったが、心細くて寝ることができなかった。明け方少し微睡んだ時、夢の中で堂の裏に出ていくと、「骸骨多く群れ居て、その挙動各々同じからず。唯世にある人の如し。あな不思議の事やと思ひ見るほどに、ある骸骨近くに歩み寄りて曰く¹⁴」。

「しばしげに、息の一筋、通ふほど、野辺の屍の、よそに見える¹⁵」

② 「身は死ぬとも、魂はしなぬは、大なる誤りなり」。悟った人の言葉では、身も魂も一緒に死ぬという。仏というも虚空のことである。身も魂も田地に帰るのである¹⁶。

「何事も、みな偽りの、世なりけり、死ぬるといふは、真ならねば」

以上を要するに、沢庵の人生後半の20年間は、出羽流罪、赦されて徳川家光の寵愛など浮き沈みの激しい時間を過ごし、適切な教化資料が少ない。しかし実弟の秋庭半兵衛に送った手紙を見ると、

沢庵宗彭の家庭教育の基本は、説話をまず行い、念押しで自作の和歌、あるいは先人の和歌を使用する形式である。

また一休宗純の『仮名法語』は、一休禅師が女子供・衆人などの教育のために垂示したもので、話頭公案を示した説話の内容は、平易を旨とし且つ道歌も理解しやすいものが多いのが特徴である。

Ⅲ. 建擿記

曹洞宗の開祖・道元研究の根本史料とされている『建擿記』は、従来面山瑞方(1683-1769)校訂の『訂補建擿記』が一般に広く用いられてきた。しかし1975年河村孝道の『諸本対校永平開山道元禅師行状建擿記』が発表されると、面山瑞方の『訂補建擿記』に対する評価が厳しくなった。

鏡島元隆は、書評『諸本対校永平開山道元禅師行状建擿記について』の中で「道元禅師の思想・伝記は、研究し尽くされた観があつて、もはや道元禅師に関しては不明なものは、なにひとつ残されていないようであるが、事實は逆である」とし、面山瑞方の『訂補建擿記』は、面山が加筆訂正し、原本と異なる箇所が多くあることを指摘、「本書は、かくして集め得た五種異本を、面山の補訂本をも含めて厳密に対校し、その異同を比較対照できるように六本すべてを並載したのであって、これによって元著者、建擿の元初の『建擿記』の姿と面山の改変の跡は、一目瞭然として読者の前に呈露されたのである」と高く評価している¹⁷。

道元の法話と和歌の関係を追うため筆者は、当初面山瑞方の『建擿記』を参考としていた。道元が北条時頼に招かれ鎌倉に下向した時、時頼に歌を所望されたことを面山瑞方の『建擿記』には「宝治元年在鎌倉、依最明寺請詠歌」とのみ書かれており、道歌の二文字がないことに気が付いた¹⁸。一方道元の詠歌を集めた面山瑞方の『傘松道詠集』には「宝治元年相州鎌倉にいまして最明寺道崇禅門の請によりて詠み給ひける歌十首」とし、一番目の句に「教外別伝」と詞書して「あら磯の、波もえよせぬ、高岩に、かきもつくべき、のりなら

ばこそ」と道元の和歌があることを確認したが、やはり詞書に道歌の二文字はなかった¹⁹。

しかし河村孝道が新たに発掘した明州手書本、瑞長書写本、延宝本、門子書写本、元文本の5種いずれにも「宝治元丁未年、在鎌倉、西明寺殿道歌ヲ御所望ノ時、教外別伝ヲ詠ス」という詞書があり²⁰、道歌の二文字が書かれている。ここで重要なことは、詞書から推測できる次の3点である。

- ①「宝治元丁未年」とあること。即ち1247年の出来事であること。
- ②「西明寺殿道歌ヲ御所望ノ時」、即ち北条時頼が道元に対して「道歌」を所望したこと。
- ③道元は、「教外別伝ヲ詠ス」、即ち佛の教えは「言葉や文字によらず、心から心へと直接伝えること」を示唆したこと。

以上のことから「1247年」には「道歌」という言葉が存在し、北条時頼は、道歌を「衆生を教化する歌」と理解していたことがわかる。

IV. 法華経と釈教歌

1. 法華経伝来

日本への仏教伝来は、『日本書紀』に「欽明13年(552)冬10月百済の聖明王、西部姫氏達卒怒喇斯致契等を遣し、釈迦佛の金銅像一軀、幡蓋若干、経論若干巻を献ずる」とあることを以て、552年が通説とされている。しかしこの仏教受容は、蘇我氏の賛成、物部氏の反対で始まり、欽明天皇は、仏像を蘇我氏に預け中立の立場を取った。その後587年蘇我馬子が物部守屋を滅ぼし、漸く仏法興隆の道が開かれた。

592年女帝・推古天皇が即位すると、聖徳太子(574-622)が推古天皇の摂政となった。「十七条の憲法」など国内政策的な業績はさておき、仏教面では607年の法隆寺の建立は、その最たるものであるが、『三経義疏』の作成も見落とせない功績である。『三経義疏』は、勝鬘経・維摩経・法華経三経の解説書であり、その作成年月日については「法華義疏は推古23年(615)、勝鬘経義疏は推古19年(612)、維摩経義疏は推古20年(613)に

作成されたので、法華義疏は、『三経義疏』中の最後の御作成である」とある²¹。

2. 大化の改新の「僧尼令」

推古天皇の摂政となった聖徳太子は、615年法華経の詳細な解説書『法華義疏』を完成させ、法華経の普及の素地を作った。また623年には推古天皇により僧尼統制機構である僧綱所が設置され、「僧正」—「僧都」—「法頭」の三綱が設けられた。645年蘇我入鹿を暗殺した孝徳天皇・中大兄皇子政権は、翌年飛鳥寺に僧尼を集め、以後天皇が仏法の推進者であることを宣言した²²。氏族仏教の終焉、天皇主導佛教の開幕である。

このように「僧綱所の設置」「天皇の仏法推進役就任」など朝廷による佛教統制を強める中、701年に「僧尼令」が施行され、酒肉飲食の禁止・音楽博奕の禁止・私度即ち私的出家の禁止・山籠もりの届出制等々罰則付きの厳しい規制が実施された。その中で注目すべきは、次の第五条の非寺院規定である。

[第五条]: 僧尼は、寺に居らずして、別に道場を立て衆人を集めて教化し、又妄りに罪福を説き、或は長老を殴打したりする者を、皆還俗させよ。(中略) 托鉢は、午前限りとし、又托鉢は、食物のみを乞うのであり、更に衣服などを乞うことはならぬ。

凡僧尼、非在寺院、別立道場、聚衆教化、並妄説罪福、及毆撃長宿者、皆還俗。(中略) 並須午前捧鉢告乞。不得因此更乞餘物。

第五条においては「道場」を「衆人を集めて教化する場」と定義している。このことから「道」とは「衆人を教化する」という意味であることがわかる。

3. 法華経における「道場」

「僧尼令」第五条から、「道」とは「衆人を教化する」あるいは「説法する」という意味であり、「道場」とは「教化する場」「説法する場」という意味であることを明らかにしたが、次に法華経の

中ではどのように使われていたかを見てみたい。

悟りを得た²⁷」とある。

(1) 如来神力品第二十一における「道場」の定義

法華経の中には「道場」なる単語が多くみられるが、法華経如来神力品は、「道場」について次のような定義付けを行っている。

「所在の国土に、若しは受持し、読誦し、解説し、書写して説の如く修行する事有らん。若しは経卷所住の處、若しは園の中に於いても、若しは林の中に於いても、若しは樹の下に於いても、若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舎に於いても、若しは殿堂に在っても、若しは山谷広野にあつても、この中にまさに塔を立て供養すべし」とし、その理由として、「まさに知るべし。この所は、即ちこれ道場なり。諸佛は、ここに於いて悟りを得、ここに於いて説法で人々の煩惱を打ち払い、ここに於いて入滅した」とある²³。即ち法華経を学び、悟りを得ようとする場、あるいは法華経を説法し、人々の煩惱を打ち払う場のことを「道場」と定義している。

(2) その他の例

- ①方便品第二に「全ての衆生で仏の力を、例えば無所畏、解脱、諸の三昧及び仏の諸余の法を推し量ることができる者はいない。長年に亘っていろいろな修行をし、道場で悟りを得て後に、私は、全てを知ることができた²⁴」とある。
- ②譬喩品第三に「我常常に世尊を見奉るに、諸の菩薩を稱讃している。是を以て日夜、善悪を判断しておられる。今世尊の言葉をお聞きすると、事情に応じて法を説いておられる。無漏とは、思議が難しい。衆生を道場に行かせよう²⁵」とある。
- ③化城喩品第七に「佛、諸の比丘に言った。大通智勝佛は、壽五百四十萬億那由佉劫なり。智勝佛は、道場に坐して、魔軍を破し終つて、悟りを得た²⁶」とある。
- ④如来壽量品第十六に「釈迦牟尼佛は、釋氏の宮を出て伽耶城を去ること、遠からぬ道場に坐し、

(3) 道場での説法の仕方

「道場」での説法の仕方についても、分別功德品第十七で次のように記述している。「今日の世尊が諸積の中の王として、道場にて獅子吼し、畏れる所なきが如く法を説くように、我等も未來世において一切に尊敬され、道場に坐す時には、このように法を説こう²⁸」と。

以上を要するに、大化改新時に制定された「僧尼令」第五条では「道場」の意味を「衆人を集めて教化する場」と定義している。

また『法華経』如来神力品やその他の「道場」は、「法華経を学び、悟りを得ようと修行する場」、あるいは「法華経を説法し、人々の煩惱を打ち払う場」としている。即ち「道」とは「衆人を教化すること」を意味している。さすれば「道歌」とは「衆生を教化する歌」と解することができる。

V. 八講

1. 法華八講

八講とは、法華経の八巻を午前・午後に各一巻ずつ四日間にわたり、八人の講師が講義する法会をいい、延暦15年(797)空海の師・勤操が奈良の石淵寺で4日間『法華経』の講義をしたのを最初とする²⁹。また天歷9年(955)正月、村上天皇が母の菩提を弔うため、弘徽殿において行った宸筆御八講は、宮中で行われたはじめての八講であった³⁰。

通常八講は、有力貴族が主催し、講師の僧侶に八講料を寄進した。例えば良源は、右大臣・藤原師輔(908-960)から贈られた所領を、1/3は法華堂常燈料、1/3は修理料とし、残り1/3を藤原師輔の菩提を回向する八講料とすることを命じている³¹。また又多くの人に佛との縁を結んでもらう「結縁の八講」も頻繁に行われた。

例えば『源氏物語』「賢木」には、「十二月十餘日ばかり、中宮の御八講なり。(中略)、初めの日は先帝の御料、次日は母後の御爲、又の日は院

の御料、五巻の日なれば、上達部なども世の慎ましさを得しも憚り給はで、いと数多参り給へり。今日の講師は、心殊に選らせ給へれば、薪樵の程より打始め、同じう言ふ言の葉もいみじう尊し」と中宮主宰の八講の様子が記載されている³²。

また『枕草子』三十二段には、「六月十餘日に、小白河殿の屋敷で結縁の八講が催された。多くの上達部が集まり、遅く行った車は、留める場所がないほど盛会であった」と結縁の八講の盛況振りが紹介されている。

また『新拾遺和歌集』花山院入道前太政大臣(藤原公経1171-1244)の「いくたびか、また世に出でし、秋の月、あまねき影は、人ももらさず」の詞書には「前大納言為家(藤原為家1198-1275)、日吉社にて八講行ひ侍ける時、人々に一品歌すすめけるに方便品」とある³³。これらの詞書から、八講の開催時には法華経各品を題材とした歌会が催されていたことがわかる。勅撰和歌集には僧侶の法華経関連の釈教歌が多いことから、八講で講義をする僧侶等も法華経の各品の大意を和歌で紹介していたことが覗える。

2. 法華十講

法華八講とは別に法華十講がある。法華十講とは、最澄が延暦20年(801)に初めて開催したもので、法華経八巻と開経の無量義経及び結経の観普賢菩薩行法経の二巻を加えた十巻を五日間、朝夕二座合計十座に分け、経義を喧伝開陳するものであった。十講には、南都北嶺の僧二十人が選抜され、一人が経典の義理を釈し(導師)、一人がこれに対して質疑を行う(問者)形をとる。応和3年(963)8月には、清涼殿において村上天皇が書写された法華経の供養する法華十講が催された³⁴。

VI. 勅撰和歌集と釈教歌

平野多恵によれば釈教歌とは、仏教に関する和歌の総称と包括的に定義し、具体的には①法文歌＝経典中の教理や譬喩・品名を題とするもの、②

法縁歌＝仏事・聖地等信仰経験を詠むもの、③述懐＝仏への思慕や宗教的心情を吐露するものと3項目に分類している³⁵。

1. 勅撰和歌集の中の法華経

最初の勅撰和歌集である905年完成の『古今和歌集』が、『万葉集』以後の凡そ150年間の歌を集めたもので、「続万葉集」と言われていることはご承知のとおりである。村上天皇下命の『後撰和歌集』は、951年完成で『古今和歌集』以後凡そ50年間の歌を集めたものである。しかし両書の和歌を逐条的に読み解いていくと、法華経的な句の薄いことがわかる。しかし村上天皇が宮廷で八講を行って法華経が世に広まった時代を反映して、1126年成立の勅撰和歌集5撰目『金葉和歌集』では、法華経関連の釈教歌も増え、更に部立てに釈教歌が設定された7撰目の『千載和歌集』では、非僧侶の歌数が僧侶の歌数の2倍となっている。

しかし8撰目の『新古今集和歌集』は、非法華経関連の釈教歌が70%にも達し、曹洞宗・臨済宗の禅宗、日蓮・親鸞など新仏教生成期の影響を受けていると思われる。

2. 釈教歌と説話

(1) 家庭教育的内容を題材にした釈教歌

法華経では、所謂法華七喩といわれている7つの説話が説かれている。これは釈迦が法華経の一部を、例え話を用いてわかり易く衆生に説いたものである。具体的には①三車火宅(譬喩品第三)、②長者窮子(信解品第四)、③三草二木(葉草喩品第五)、④化城宝处(化城喩品第七)、⑤衣裏繫珠(五百弟子受記品第八)、⑥髻中明珠(安楽行品第十四)、⑦良医治子(如来寿量品第十六)である。この七喩関連の釈教歌は、まさしく「法華経の道歌」であり、「家庭教育的道歌」といっても過言ではない。一例を挙げれば、『千載和歌集』の釈教歌に「法華経葉草喩品の心を読み侍りける」と詞書のある源信(942-1017)の「大空の、雨はわきても、注がねど、潤ふ草木は、おのがさまぎ

ま」という歌がある³⁶。これは「厚く重なった雲が広がり、雨は、分け隔てなく降り注ぐけれども、吸収する草木の水の量は、大小まちまちである。佛の教えもそれを吸収する程度は、人によって異なる³⁷」という説話「三草二木」を歌ったものである。人間の能力は、千差万別であり、能力に見合った教育をしなければならぬことを示唆している。

また『新古今和歌集』の釈教歌に「化城喩品 化作大城郭」と詞書のある慈円（1155-1225）の「思ふなよ、憂き世の中を、いで果てて、宿る奥にも、宿はありけり」という歌がある³⁸。これは「多くの衆生が悟りを求めて悪路をきたが、疲れ果てて帰ると言い出したので、導師が仮の城を造り、衆生を泊め休養させたあと、最終目的地へ出発した³⁹」ことを詠っている。即ち本当の都はまだ先にあり、現世の仮の都に満足してはならないと詠っている。

『続古今和歌集』の釈教歌に「弟子品」と詞書のある前権僧正快雅（未詳）の歌「嬉しきは、袖につつまし、玉ぞとも、今日こそ聞きて、身に余りけれ」がある。貧乏な男が酔って寝ている間に、友人が高価な玉を襟に縫い込み、外出したため気が付かず、また各地で苦勞したあと、再び友人と会った時、その玉のことを言われて、初めて気が付いた話である。「どんなに有意義なことでも、教えてやらなければ、自分ではわからない」ということを示唆している。

（2）宗教哲学的内容を題材にした釈教歌

『拾遺和歌集』に和泉式部（976-1036?）が「性空上人のもとに詠みてつかわしける」と詞書した「暗きより、暗き道にぞ、いりぬべき、遙かに照らせ、山の端の月」という歌がある⁴⁰。これは『法華経』化城喩品第七にある「衆生は、常に苦惱し、道理に暗くしかも導師が無い。また苦の尽きる道を知らず。解脱を求むることを知らず。長夜に悪趣を増し、諸々の天の神々を滅損す。冥きより冥きに入りて、永く佛の名を聞かず⁴¹」か

ら取ったものである。和泉式部は、法華経本文のワンフレーズを記憶していたのである。

『金葉和歌集』の歌に「龍女成仏をよめる」と詞書がある勝超法師（1065-?）の「わだつ海の、底の藻屑と、見しものを、いかでか空の、月となるらん」という歌がある⁴²。『法華経』提婆達多品第十二に「文殊が海中で法華経を説く中で、8歳になる龍女が阿羅尼を得、成仏することとなった」というと、他の菩薩が女人には5つの障りがあり、成仏することはできないといった。その時龍女が現れ、釈迦に寶珠を一つ献じ、釈迦がそれを受け取るや否や、男子に変わって菩薩となり、十方で妙法を説く姿が見えた⁴³」ことを歌った歌である。女人でも成仏できることを示した説話である。

『新勅撰和歌集』に、崇徳天皇の母である待賢門院中納言、藤原璋子（1101-1145）の二十八品歌会に出席した藤原俊成（1114-1204）の歌「みなしと、何嘆きけん、世の中に、かかる実りの、有りけるものを」の詞書に「待賢門院中納言、人々にすすめて法華経二十八品歌よませ侍けるに、譬喩品其中衆生悉是吾子の心をよめる」とある⁴⁴。譬喩品の「其中衆生、悉是吾子」とは「今この三界は、皆我が所有物である。その中の衆生も、悉く吾が子である。而も今この三界は、諸々の困難・苦しみが多い。唯我のみがこれを能く救護することができる⁴⁵」という意味である。

以上を要するに、法華経と釈教歌の関係をみると、法華七喩や分かり易い説話など家庭教育的内容を歌い込んだ釈教歌と法華経の宗教哲学的内容を歌い込んだ釈教歌の二種類があることが分かった。法華七喩の釈教歌は、僧侶はもちろん、非僧侶の釈教歌の詞書にもなっている例が多いことから、法華七喩など法華経の家庭教育的内容の衆生への浸透ぶりが覗える。また『拾遺和歌集』が完成した1007年には和泉式部が化城喩品第七にある「暗きより暗きに入りて、永く仏の名を聞かず」（従冥入於冥、永不聞佛名）というフレーズを和歌にしたことから類推すると、上流社会、あるいは識者層には、この時代かなりの程度に法華経の

宗教哲学的な内容が浸透していたことは確かである。

VII. 最後に

法華経には、「道場」という言葉が頻繁に出てくる。方便品第二において「私は、長年に亘っていろいろな修行をし、道場で悟りを得て後に、全てを知ることができた」とあり、化城喩品第七では「佛、諸の比丘に言った。智勝佛は、道場に坐して、魔軍を破し終って、悟りを得た」と、如来壽量品第十六に「釈迦牟尼佛は、釋氏の宮を出て伽耶城を去ること、遠からぬ道場に坐し、悟りを得た」とあり、如来神力品第二十一では、「諸佛は、ここに於いて悟りを得、ここに於いて説法で人々の煩惱を打ち払った」としている。即ち道場とは「修行をする場、悟りを得る場」であり、また「衆生を教化する場」である。また大化の改新時制定された『僧尼令』第五条では、「道場とは衆生を集めて教化する場」と明確に定義している。

以上を要約すれば、法華経でいう「道」とは「衆生を教化する」あるいは「悟りを得るために修行をする」という意味である。さすれば「道歌」とは「衆生を教化する歌」であり「僧侶の修行の歌」といえる。即ち道歌とは釈教歌のことである。

次に、法華経と勅撰和歌集の釈教歌との関係を見ると、まず釈教歌には法華経の宗教哲学的内容を歌い込んだ釈教歌と法華七喩や分かり易い説話など家庭教育的内容を歌い込んだ釈教歌の二種類がある。宗教哲学的釈教歌は、無染居士がいうように、高名な僧侶が仏の考えを追い求める修行の合間に、自分の心を詠んだ歌であり、あるいは識者や上流社会の貴族が法華経の更なる理解のために詠んだ歌である。鎌倉時代の執権、北条時頼が道元に乞うた道歌は、この類いのものであった。一方、法華七喩等の釈教歌は、法華経を熟知していない衆生を教化するために詠ったものである。

室町時代になると、衆生教化のための道歌から一部が変化し、道德教育的・家庭教育的内容の道歌に発展していった。例えば一休宗純の「法語」

の中には、宗教哲学的内容を詠った道歌と「一休も、破れ衣で、出るときは、乞食坊主と、人はいふらん」と身嗜みの大切さを強調した家庭教育的内容の道歌とがある。また、江戸初期の沢庵宗彭は、弟へ「借金はあるな」と注意をしたあと、「心だに、誠の道に、はいりなば、祈らずとても、神や守らん」とその理由を詠っている。江戸中期になると、道德教育的・家庭教育的内容の道歌は、石門心学を初め多くの分野に利用され隆盛を極め、現在に至っている。

以上、現在の家庭教育の一手段としての道歌の起源は、法華経の衆生教化のための釈教歌にあることを論証したが、衆生教化のための道歌から一部が変化し、道德教育的・家庭教育的内容の道歌に発展していった社会的背景などについては今後の研究課題としたい。

註

- 1 鈴木棠三『狂歌鑑賞辞典』（角川書店昭和59年17頁）
- 2 柴田鳩翁（1753-1839）石川謙校訂『鳩翁道話』（岩波文庫2000年25頁）
- 3 石川謙校訂『道二翁道話』（岩波文庫、1991年54頁）
- 4 大久保正編『本居宣長全集第十五巻』「鈴屋集」（筑摩書房、昭和44年162頁）
- 5 古川哲史『広瀬淡窓』（思文閣、昭和47年99頁）
- 6 禅文化研究所『一休道歌』「一休蝸川狂歌問答」（平成12年181頁）
- 7 足立栗園校訂石田梅岩『都鄙問答』（岩波書店岩波文庫1999年20-21頁）
- 8 諸橋轍次『論語の講義』爲政第二（大修館書店2004年23頁）。
- 9 石川謙校訂『道二翁道話』（岩波書店岩波文庫1991年54-55頁）
- 10 石川謙校訂『道二翁道話』（岩波書店岩波文庫1991年68-70頁）
- 11 辻善之助編注『沢庵和尚書簡集』（岩波書店

- 1993年49-50頁)
- 12 辻善之助編注『沢庵和尚書簡集』(岩波書店1993年50頁)
- 13 山田孝道師校補点註『禪門法語集』「一休仮名法語」(光融館明治28年272頁)
- 14 山田孝道師校補点註『禪門法語集』「骸骨」(光融館明治28年284頁)
- 15 ほんの少しでも息があるうちは野辺の屍もよそ事のように見えるの意
- 16 山田孝道師校補点註『禪門法語集』「骸骨」(光融館明治28年290頁)
- 17 駒澤大学佛教学部論集巻6、鏡島元隆『諸本対校永平開山道元禪師行状建擿記について』(1975年145頁)
- 18 佛書刊行会『大日本仏教全書』「面山訂補建擿記」(大正6年558頁)
- 19 来馬琢道編『禪門曹洞宗典』(鴻盟社大正8年499頁)
- 20 河村孝道『諸本対校永平開山道元禪師行状建擿記』(大修館書店昭和50年87頁)
- 21 世界聖典全集刊行会編輯『三経義疏』(世界聖典全集刊行会大正9年385頁)
- 22 田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』(吉川弘文館昭和55年127頁)
- 23 国民文庫刊行会『国譯大藏經』法華経如来神力品第二十一原文(昭和10年95頁)
- 24 国民文庫刊行会『国譯大藏經』法華経方便品第二原文(昭和10年8頁)
- 25 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経譬喻品第三原文(昭和10年16頁)
- 26 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経化城喻品第七原文(昭和10年38頁)
- 27 国民文庫刊行会『国譯大藏經』法華経如来寿量品第十六原文(昭和10年77頁)
- 28 国民文庫刊行会『国譯大藏經』法華経分別功德品第十七原文(昭和10年82頁)
- 29 大角修訳・解説『法華経』(角川文庫令和元年、444頁)
- 30 平林盛得著『良源』(吉川弘文堂昭和62年、51頁)
- 31 平林盛得著『良源』(吉川弘文堂昭和62年、122頁)
- 32 島津久基校訂『源氏物語』(岩波書店昭和23年、219-220頁)
- 33 太洋社『二十一代集』第九「新拾遺和歌集」卷第十七(大正15年、495頁)
- 34 平林盛得著『良源』(吉川弘文堂昭和62年、69頁)
- 35 日本文学協会『日本文学』2014年63巻7号(平野多恵「釈教歌の方法と文体」24頁)
- 36 太洋社『二十一代集』「千載和歌集」卷十九(大正14年483頁)
- 37 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経薬草譬喻品第五原文(昭和10年33-34頁)
- 38 太洋社『二十一代集』「新古今和歌集」卷第二十(大正15年426頁)
- 39 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経化城喻品第七原文(昭和10年46-47頁)
- 40 太洋社『二十一代集』「拾遺和歌集」第二十(大正15年247頁)
- 41 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経化城喻品第七原文(昭和10年39頁)
- 42 太洋社『二十一代集』「金葉和歌集」卷十(大正14年133頁)
- 43 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経提婆達多品第十二(昭和10年63頁)
- 44 太洋社『二十一代集』「新勅撰和歌集」卷十(大正14年77頁)
- 45 国民文庫刊行会『国訳大藏經』法華経譬喻品第三原文(昭和10年23頁)